

鯛

泉鏡花作

—

皆様はお駒の淨瑠璃を御存じでございませ

う。．．．何、別にそんなものを御存じなくて

も可い。お駒が密通の toga で、江戸町中引廻しの

上．．．これは誰方も御承知の品川の先の安房

上總見靈の浪打際で、磔に掛るのを、見物——

一寸お待ち下さい。

大商人の若い細君が磔にされるのを見物は可訝

い。．．．其の時分の人、恚う云ふ刑罰を見

に行くことを、お互に何と申したか、手近に訊正す

べき故老がないので解りません。惟ふに皆様もお知

りなさいますまい。私も知らない。

しかし、其の淨瑠璃の中には、恚うあります——

餘り待ったで寒なつた、鮫洲のお茶屋で一杯しよ、

さあ／＼ござれと打連れてエ、皆みいな、と太く  
いゝ機嫌に浮れたもので、此の分だと、もの見遊山  
の氣分でございます。

處で、此の實説中の艶麗なる細君と、出入の魚屋  
の若いのが、あるまじき密通、尚ほ其の上に、姑殺  
と云ふ逆罪によつて、同じ刑場で磔の刑に處せられ  
ました當日、・・・お定りの矢來を取巻いた數  
萬の群集も、何うやら活きた劇の幕開でも見るつも  
りで居たらうと思はれます。

可哀相に、殺される男女は、そんな呑氣なものぢ  
やあない。

天氣はよし、風は凧ぎたり、春霞で、場所は廣重  
の繪の五枚目あたり、東海道でも名所の中で、景色  
言分なし、棧敷は無錢だし、見物連には更に遺憾は  
なからうけれど、　　こゝへ瘠馬から下されて、  
悄悄として刑場の眞中に迫立てられた當人たちの身  
に成つて御覽なさい。

極樂の影とも見よう、世に蓬萊と譬へらるゝ、富

士山さへ、罪あるものには背けられて、霞が隙に見ゆるのが、鋸山、と言ふのさへ疼々しい。

「下に居れ。」

間三間を隔てました礫柱の一つ一つに、男女は引据ゑられたのであります。

女は、お洛と言つて、年、二十六、二十うち外に見えたと言ひます。もと浪人の娘で、容色のぞみで、日本橋宗右衛門町の老舗、鼈甲問屋長崎屋に娶られました、  
大資産家の御新姐。

水髪を毛卷島田、薄化粧に鐵漿をつけて、死支度の白小袖、淺葱縮緬の長襦袢、黒繻子の帯で、襟に水晶の珠数を掛けて居ました。凄いほど色が白い。両手もいましめられて居るとは見えない、首も胸も一つに薄りと霞んだやうでございます。

勿體ないやうだが、此のお身代りの普賢菩薩の像のやうな姿に對して、對手の魚屋は實に醜劣で、講釋師の所謂、何とかの蔓と稱するやうなものもなく、牢屋で世話の仕手もなかつたか、一枚着換へるすべもなく、獄衣のまゝで、憔悴脱落、頤にも頬に

も一面の髯だらけ、年紀は御新姐とは一つ下の本厄  
だと言ふ若さに、心氣の枯れた身は白い毛さへ交つ  
たらしい。ぢぢむなのが、背骨も胴體も、八重搦に  
成つて這突張つた形は――此の蟲が出るとやが  
て涙の雨かも知れない。――美女の白衣に對し  
て、霜の上へ這出した草鞋蟲のやうでございました。

「友七、友七。」

係の役人が、床几に控へて、――四邊が鳴を  
静めた時、かう言つて渠を呼びました。

「面を上げい、面を上げい。」

「へい。」

と蟲の鳴くやうな聲、ハテナ草鞋蟲が鳴きますか  
知ら。

「これ、面を上げい。」

と嚴に、しかも鷹揚に申さるゝ。――役人は  
小出番之丞と、時の記録にございます。

魚屋の友七が、茲にお受をしましたのが、何とも  
間の抜けたものでございまして、

「へい、上げて居ります。」

成程、胸も背中も、だらしなく、ぐしやりと地に

挫げながら、頤で嘗めるやうにして顔を上げて居りました。しかし、熟と視て居たのは、此の際、閻魔大王であり、また地藏尊であるべきお役人の顔ではなくて、可恐しい生命とりの御新姐の、靜に首垂れた雪なす頸でありました。

面を上げい。

へい、上げて居ります。

これでは、些とお役人は勝手が違ひました。

恩も、威も、ともに、傍へそれたのを、膝に構へた扇子と諸ともに立直して、

「これ／＼、臨終の際に、何か申残すことはないか。」

「え。」

と言ひつゝ、齒も唇もわな／＼と震へて居ります。

「申残す儀はないか。これ友七、魂をよく落着けて申せよ。」

「へい、た、魂は落着きませぬ。」

「何。」

又しても、詭の違つた變なことを言ふから、役人は聞返して、

「いやさ、其の落着かめ魂を落着けて申せと言ふのぢや。――な、臨終の際に何か――」

今度は、すぐに解るやうに、

「……何か願事はないか、番之丞聞届け遣はずぞ。」

「旦那。」

と、むく／＼と身を起した状は、しかし矢張り草鞋蟲が縦に這つたやうでありました。

「お願ひがございます。」

「ふむ。」

とは言つたが、役人は、威儀爽かに床凡を前へ乗出す筈の處を、胸を些とあとへ引きました。と申す事でございます。

「何……ぢや。」

「お聞きなすつて下さりますか。」

「うむ。」

と言つて、些と差支へた。……はじめから、聞く處によると、渠等兩人の死刑囚は、婦人

も然うだつたが、下調べでも白洲でも、何一つ、こ  
だはりも、未練もなく白状して、すら／＼と罪に伏  
したので、政府に於ても、磔と言ふ極刑に處するの  
に、此のくらゐ寢覺のいゝのはなかつた。

ものは違ふけれど、大阪の陣では、鐵砲を折敷に  
打つたのが、後天草の役では、足輕が棒立ちに立  
つて打つた。此を見て、――其の間僅に二十年  
――戰場生残りの老兵が、歎息をしたと言ふ事  
がある。

仁政世に普く、民心も治に化して、久しく極刑を  
侵すものゝないために、磔の様式か忘れられた頃  
だつたら、一寸、式を取ために使つても可いまで心  
易い罪人で斬刻まうが突かうが三年早したり、六月  
霜を降らしたりするやうな憂はない。

同時に、……そんなあきらめの可い罪人、  
――それも、町中引廻しの途中だと、水を一口、  
ぶつかけ蕎麦を一杯程度の臨終の望を申出ないとも  
限らない、且つ、勿論それは仔細ない――が此

の場に望んで、何事を申出よう？ 別シテ、友七の方は、女房も子供もなし、両親もなし、叔父が一人ある切なれば、どんな望みも、遺言もあらうやうはあるまいと、役人はたかを括つて、見物（？）の前、周囲の見榮に、内々畠山重忠 ー 役人だと其の頃の澤村宗十郎と云ふ處を試みたのであります。

「面を上げい、友七、臨終の際に願はないか、番之丞聞届け得さするぞ」 と、 ー

其の日、刑の執行の順序は、先ず這奴が面前で御新姐の白い柔な乳の脇をツブリと鎗槍で貫いて見せて次に友七に及ぼす筈。 . . . 順序としては御新姐が前だが遺言を聞いて聞届けさする方は、男の方が先だつた。 . . . 御新姐の方は、種々繫累が多いから、うつかりいまはの望みなどは聞かれな . . . 其處は役人も如才がなかつた。

然るに ー

「旦那、お聞きなすつて下さいますか。」

「うむ . . . . . 何ぢや申せ。とにかく . . . . .

予が聞き置く。」

「へい、臨終の願ひでござります。」

「うむ。」

いま磔柱を腰につけたものゝ言ふことでありますから、番之丞も自分が言出した事だけに、左右を顧みて固唾を飲む。

見物にも無論聞えた。

近い處から饒舌り傳へて、一度、どどと鳴つて、やがて寂然と耳ばかりの波が打つた。

此の耳と耳が唯一方に向いた處は、鰻屋で割く鰻の頭が、ぬめりと揃つて、眞黒に押重つて、一つづゝ目をバチノゝと同じ方角を向くのと同一だつたさうであります。

友七の願望と言ふのは

「磔に成ります前に、へい、御新姐さんと一所にねたうござります。」

其の當時、これがために、特に記録に傳へたと言ふのであります。

眞個でせうか。

十萬人唾然とした中に、――獨り、艶かな御

新姐しんぞのもつれた鬢びんが、はら／＼と揺れたと思ふと、  
水のやうに透通すきとほつた臉まがたに、ほんのりと色いろを染そめた。  
風かぜなきにひとり聲こゑある刑場しおきばの松まつも長閑のどかに、縛いましめの繩なはは、  
羽衣はころもの白しろき袖そでを敷しいて、ぼつと桃ももの映うつつたやうに見み  
えました。

唯思とおもふ見物けんぶつの群集ぐんじゆは、天そらに一面めんの黒雲くろくもと成なつて、  
叫さけび聲こゑは雷いかづちのやうに鳴渡なりわたつた。

大不機嫌だいふきげんであるべき筈はずの役人やくにんが、笑わらひ／＼、しか  
し、手てに汗あせを握にぎりながら、衝つと床几しやうぎを離はなれて立たちま  
した。

「白痴たはけめ！」

今度こんどは見物けんぶつも、穢多ゑたも、非人ひにんも、一同どうに聲こゑを揚あげ  
て哄どつと笑わらつた。

成程、白痴に違ひありません。友七は、侠で勇  
 な江戸の魚屋の中に、些とおめでたいと言はれるく  
 らぬ、人の好い、おとなしい若いもので、刑場では、  
 そんな草鞋蟲同然に見えましたが、一體色白で、く  
 る／＼と肥った、眉のとぼけた、頤の圓い、無邪氣  
 なものでありました。

働きもなければ、罪もない。女もない、女房らし  
 いものもない、女房も固よりない。軽少な魚屋  
 で。．．．．長屋はちゃんと解つて居ります。芝  
 金杉四丁目を濱方へ入る路地、．．．．其の頃、  
 俗に身延横町。で、場所がらの事ゆゑ、魚も賣つて  
 あるけば、漁もするし、雇はれゝば網も打つ、船も  
 漕ぐ。

が、不思議な事は、其のぼんやりした慾のない友  
 七が、禁厭がじやうずだつたのでございます。禁厭  
 も唯一つ、刺抜をするのであります。此だけは奇術  
 異法と言つても宜い。．．．．それも至極簡單で、  
 自分、神佛を念ずるでもなければ、他に行をさせる  
 でもありません。石の腸も、海鼠の骨、鰯の頭も何

にも入らない。棘が刺つて難儀をするのが、身延横  
町の其の長屋を訪ねて頼むと、唯  
一言、

「よし、よし。」

と、友七が言ふと齊しく、如何に、念入な刺も、  
言下、立處にするりと抜ける！・・・千百人に  
一度も、一人も、間違とはありませなんだ。

鼈甲問屋、長崎屋の御新姐の事のために、町奉行  
が刺抜の術を検べて、何事か、深秘な家法口傳など  
があるかと訊ねた時、友七は、唯小兒の時、家の祖  
母に、――頼まれた刺を抜かうと念じて、

（よし、よし、）とさへ言へば、（すぐに抜  
るぞ、）と教へられて、其の通にするだけだ、と  
答へましたが。

お奉行は怪みました。

「■であらう。」

「眞個でございます。」

「其方の父は、何うぢや・・・同じ刺抜をい  
たしたか。」

「何でございますか、父はお禁厭をしなかつたん

でございます。」

「何か法があるであらう、**二**を申すな。」

「いえ、全くでございます。何も秘傳はございま

せん、へい。」

友七の此の答に裏書をしましたのは、合長屋の同じ漁師の女房でございました。

一度、七歳ばかりの男の兒——芝片門前あたりの提灯屋の兒ださうで、蹠に釘の踏抜をしたのが、何うしても抜けないで、ひい／＼泣くのを、兩親が抱きつ負ひつしてお禁厭を頼みに來ました。なれど、折悪く友七が内に居ない。何處へ呼びに行かうと言ふ出先も分らないので、兩親の當惑、小兒のなやみ、其の生憎さ。合長屋の女房が見るに見兼ねました。

「はい／＼、お奉行様の前で恐入りましてござりまするが、ものは験と存じまして、友さんのお禁厭を見やう見眞似に、其の兒の足を撫でまして、（よし／＼）と一言申しますると、すぐにポイと抜けてましてございます。」

が、此の女房のは、其切で、あとは幾度試みても  
些とも験がないと言ふのであります。――此は後  
の事――

さて、或日、友七が商賣から歸つて、此から一風  
呂と、手拭を持つて出掛けようとする露地へ、梅檀  
の材で拵へたかと思ふ、芬と得ならぬ薫のする駕籠  
が一挺入りました。

消防夫と、手代と、年配の女中が着いて居ます。  
氣勢は外からでも知れる。蠣殻、小貝、蛤に、晝間  
の鳴く侘しい處へ、艶なる女駕籠は、田舎源氏の  
桂木の繪が、須磨へ迷つて來ましたやうな、其の裡  
なのが此の御新姐、長崎屋のお洛でございました。

其その前まへ晩のばんの事ことだつた。

—— お洛らくが夕ゆ餉ふけを濟す

まして、

箸はしをおいて、一寸ちよつとうつむいて、爪つま楊やう枝うじをつかひながら茶ちやを一口ひとくち、艶つやかな鐵か漿ねの口くちへ含ふくみました。ト夕たに隱いん居きよ所じよで、界かい隈わい評ひやう判はんの姑しよが、惡わるく猫ねこ撫なで聲こゑで、

「お洛らくや。」

「はい、」

と言いつて立たつた拍ひやう子しに、茶ちやは涼すずしく通とほりましたが、

其その

爪つま楊やう枝うじが、ツと迂すべると、可おそ恐ろしい、ものゝ機はずみで、咽のど喉どへ横よこに刺たつたのでございます。吃びつ驚くりして、手てで壓おさへて抜ぬかうとすかと、尚なほ其その上うへにブツリと刺さつた。……裡なかから透とほして、刺ささつた楊やう枝うじの尖さきのとがつたのが、眞ま綿わた、薄うす絹ぎぬの皮かわ一ひと重へで、指ゆびにびく／＼と觸さつたのには、御ご新しん姐ねは、最もうぞツとして震ふるへました。

女をんなどもが走は集せつつて、象ざう牙げの箸はしで擦さすつても、撫なでゝ

ても、なか／＼、抜<sup>ぬ</sup>けも、通<sup>とほ</sup>りもしない。あせつて咳<sup>せき</sup>をするたびに、つぶ／＼と深<sup>ふか</sup>く刺<sup>さ</sup>ります。

「お洛<sup>らく</sup>や。．．．．」

早<sup>は</sup>や思<sup>おも</sup>ふやうに聲<sup>こゑ</sup>さへ出<sup>で</sup>ません。

姑<sup>しつこ</sup>は長<sup>なが</sup>煙<sup>えん</sup>管<sup>かん</sup>を片<sup>かた</sup>手<sup>て</sup>に出<sup>で</sup>て來<sup>き</sup>て、

「お風<sup>か</sup>邪<sup>ぜ</sup>氣<sup>け</sup>かの、大<sup>だい</sup>分<sup>ぶん</sup>咳<sup>せ</sup>きなさるの。此<sup>こち</sup>方<sup>ち</sup>は口<sup>くち</sup>へ風<sup>か</sup>邪<sup>ぜ</sup>を引<sup>ひ</sup>くぞ。」

で、火<sup>ひ</sup>鉢<sup>ばち</sup>のふちへ消<sup>きえ</sup>々<sup>／＼</sup>と成<sup>な</sup>つた御<sup>ご</sup>新<sup>しん</sup>姐<sup>ね</sup>の耳<sup>みみ</sup>へ、臭<sup>くさ</sup>い口<sup>くち</sup>をつけて、大<sup>おほ</sup>きな聲<sup>こゑ</sup>で。

「お洛<sup>らく</sup>や。」

「は．．．．い。」

や。

傍<sup>そば</sup>から女<sup>をんな</sup>どもが仔<sup>し</sup>細<sup>さい</sup>を言<sup>い</sup>ふと、

「不<sup>ふ</sup>斷<sup>だん</sup>行<sup>ぎやう</sup>儀<sup>ぎ</sup>が悪<sup>わる</sup>いからぢや。親<sup>おや</sup>のしつけが思<sup>おも</sup>はれるぞ。．．．．是<sup>これ</sup>に懲<sup>こ</sup>りての、ぬしたちも謹<sup>つし</sup>まつしやい。」

と女どもに一睨をくれて、猫背で裾を曳いて、煙管を持つたなり、づか／＼出て行く。

時刻が経つと、其の日留守だった主人の出先へ小僧が使に立つほどの容體に成りました。次第々々に咽喉がはれて、疼むこと夥多しい。湯水も通らなく成つて、深夜、明方、あくる朝を掛けて、本道外科も手をつかねた。勿論、灸も、鍼も、按摩も、施す術がなかつたのでございます。

わづかに爪楊枝一本で、江戸の、一枚繪とも言ふべき御新姐が、唯其のまゝでは死を待つばかり、鼈甲屋の店は簾を掛けたやうに陰氣に暗く成りました。

成田へ日歸をすると言ふ、足だつしやの町内の頭が、午過ぎに駈つけました。秋の半の時候はよし、是は夜半だちに成田へ詣で、朝護摩を上げて歸つたと言ふ大俠勇。

「……えゝ、もし、桶町の大六さんの普請の時を御存じでございますかね。大工の安五郎の悴

だ。十四に成るそりへがしが、遊び半分手間取に來て居ましたかね、悪戯な奴で、四邊構はずすツ飛ぶもんだから、跳る拍子に四目錐を蹴つけたんだが、間拍子の悪い事は、柄の込際からプツリと足のおや指へ突刺つた。勢は凄じい、骨へ搦んだと見えて、引いたつて、しやくつたつて、鑷や釘拔で抜ける處の騒ぎぢやあねえ。しまひには一寸觸つても悲鳴を上げて轉げ廻る。手のつけやうがねえ、と言ふうち膝まで紫色にはれ上つた。此奴あ生命とりだね。」

頭は此處で、芝の友七の事を話したのでございませす。

「竹の輿で釣出して、身延横町へ運びますとね、可い鹽梅にとげ抜大明神御鎮座だ。斯の通と、刺を見せると、色の白い恵比須顔で、よし／＼と、言つたか言はねえかに、つるりと抜けて落ちたつてね。切で結へてこそ居ましたけれども、翌日は親父と一所に桶町の仕事場へ出て來ましたぜ。……現に見て私が知つて居るんだよ、ものは驗だ。——番頭さん、すぐに御新姐さんをお連れ申しちやあ

何んなものだね。」

途方にくれた鼈甲屋は、芝の方へ光明がさします。

御新姐は、其の苦みの中にも、纏れた圓鬘を撫でつけて、路考茶の縞縮緬に、紅羽二重の對丈襦袢。

姑が部屋を覗きに出て来て、

「やれ、好色らしい、おめかしかいの。ぞろりと  
の。」

緋の腰帶をしたまゝ、褌を亂して、腰をするりと、消えるやうに、お洛は膝をつきました。駕籠に乗るにも手を曳かれたのでございます。

頭が一所に供をして。

「やあ、大明神、お頼み申すぜ。」

女中が駕籠の垂を上げました。其の艶に美しいのが、無慙や、咽喉に矢を貫かれて居るやうでございます。唯、天降つた大明神は、おなじ天降つたに

ても、凧が切れて落ちたやうに、手拭を掴んだまゝ、  
駕籠の棒端にふら／＼して居る。

「何うぞ、お禁厭を願ひます。」

と、手代も折め正しく揉手をする。

「お願だ、大明神。」

「へい。」

と大明神は、のたまふばかり。

「どんなに、お苦しいだらうねえ。まあ……  
唯今すぐでございます。……兄さん、何うぞ

お頼み申します。」

と、ひたと駕籠の戸に寄添つて居る女中も言ひま  
す。

路地は抜裏、兩方へ人の山。

「頼むツてんだ、おう、兄哥。」

「御免下さい。」

と友七は、頭の權幕に怯えた體で、

「何うもね、頭、何うもね、頭。その私のお禁厭  
が、何でございますよ。權柄らしくございますので  
ね、可うございますとか、結構でございますとか、  
言ふんだと可いけれど、何うもね、え、此の、お  
御臺様にや勿體なくてね、へ、へ。」

「笑事ぢやねえ、此の御容子を見ねえな、お御臺  
様だつて言はあ、御臺様だつてお禁厭だ、遣つてく  
んねえ。」

「だがね、頭の前だがね。何うも、へ、へ。」

「あれ、また私笑りやがる、箠あ弛んでるぜ、片  
手桶め。」

「御免なさいまし。」

「あやまれちやあ困つ了ふ。ぢやあ何うすりや  
可いんだい。」

「其のね、お御臺様から、許すとか、い、よ、と  
か何とかね、一言おつしやつて下さると、其の勢で  
行れようと思ふんでございますがね。」

女中の手へ、もみぢが、ちらりと、袖口がこぼれ  
かゝつた。白魚の手を継りざまに、駕籠の戸を出よ

うとした、片袂落つる紅は、咽喉の血の滴るやうに  
蠟殻の亂に震へつゝ、

「召使と思つて下さいまし、・・・・御存分に  
遊ばして。」

とお洛が消々に言ひました。

「よし／＼。」

「あッ。」

噛裂くやうに、口へ當てた、懷紙に紫の血が、ど  
ツと散つて、鮮血の

楊枝が一條。

豫て病身なお洛が、それから、鳩尾のさしこみ、  
頭痛、めまひの度ごとに、鍼も薬も効かないで、刺  
ではなけれど、友七の（よし／＼）で、すぐに  
治るが癖に成つて、しば／＼宗右衛門町の内儀へ迎  
へる。――次第に浮名が立ちました。

亭主と言ふのは、女中、下婦、對手は選ばぬ至極  
の色好ではありませんでしたが、ぐづらものゝお人よし。  
一面痘痕があるばかり、顔もさして醜くもなかつた。  
が、兩方の耳の穴から、も一つ、耳が出たやうに、

蠶豆ほどのものが、何やら頭を出して附いて居て、  
少々氣味の悪い男なのでございました。  
龜の怨念だと噂をしました。嘘ばかり、鼈甲屋  
と泥龜屋とは違ひますもの。

四

「お洛。」

「おのれが給仕したぞ。」

「お洛、おのれが給仕したぞ。」

或日　　―　其の夕餉に、潮を吸つた、鯛の骨が咽喉に刺さつて、姑が激しい惱をしたのであります。

「お洛、おのれが給仕したぞ。」

出入どめに成つて居ました、芝の友七兄哥が、小僧の早打で駈つけました時も、隠居は、最う青白く成つて消入りさうなお洛の肩を、皺手でむずと掴んで、揺ぶつて其を言つた。

「友さんかい。」

「御新姐さん、大丈夫でございます。」

と、魚友は其の有様に、ぼろ／＼と大粒な涙をこぼしながら、姑隠居の背中へ廻つて、

「よし／＼。」

と申しました。

鯛の骨はツイと抜けた。が、しかし咽喉を抜けて、胃を傷つけて、グサと腸に刺さったのでございます。

もう、其の夜の中に、姑は七顛八倒の苦惱にかゝりました。

「うーむ、夜叉め、……鬼め、馴合つて私を殺すな、うゝむ、苦しい、うゝむ苦しいぞ、堪へ難いぞ。」

はじめ、骨の刺さつた時から、引摺んだお洛の袖を、寝つゝのたうちながら何時までも離さなかつた。

一類の集つた斷末魔に、逃げも、走りも、起居も出來ず、臺所の隅にまご／＼して居た友七を、兩手を引立てゝ連れて來させて、お洛と二人を、

「やあ。」

「あれえ。」

左右に取つて、兩手に引伏せ、

「人殺し、姑殺し、親殺し……敵を取れ、敵を取れ。悴——長崎屋の一類縁じや。」

と、うめき／＼、悪相を顯して、もだえ死に死ん

だのでございました。――

お奉行が白洲に於て、

「友七、其方は、長崎屋の隠居を何と思ふ。」

「はい、猫またと存じます。」

お奉行が、しばらく考へておいでなすつた。

「其方は、刺を抜く時、何と思つた。」

「はい、抜けずに死ねばいゝと存じました。」

別におなじ事を……言をかへて、お洛に、

「有體に申せよ、――其方は姑が死ねばいゝ

と思つたであらう。」

「はい。」

と、申しました。――

お奉行は、ハツとして、見下す筈の女を反對に、

廳の天井を仰ぎました。「はい。」と言つた一

言は、何故か、おほ空から聞えたやうに思はれまし

たから。

とに角、許しやうはない。

これが、遠山左衛門、おいらんの所謂、金さんだ

と、計ひやうがあつたかも知れませんが、此のお

奉<sup>ぶぎやう</sup>行<sup>かう</sup>は正<sup>たゞ</sup>しいお方<sup>かた</sup>で、意<sup>いき</sup>氣<sup>き</sup>な人<sup>ひと</sup>ではなかつたのでござい<sup>ま</sup>す。

「……白痴め。」

「詈りもあへず、番之丞が指揮の下に、礫柱を立てた状は、大いなる魔の簪のやうに見えましたさうでございませう。」

槍がチャリンと……グイと引いて、雪を欺くお洛の脇を肩先へ、穂尖鋭く貫いた。渚の浪の白いの、衣ながら女が胸を其のまゝに揺いだ時、……黒髪をはら／＼と、顔を横に、項白く、……苦痛が思遣られる。……唇をひしとあてゝ、襟に掛けた其の水晶の珠数を力キリと前歯で噛みました。

立ち並んだ礫柱の上から、是を見て、凝視めると、

「やあ、大きな刺だなあ。」

と、まだ槍を被らない、蒼しよびれた草鞋蟲の友七の面に、眞赤な血が赫と上つて、

「よし、よし。」

と大音に叫んで、躍り上るやうに身悶した。

お洛は端然として、そして莞爾しました。

續いて貫た槍に血も染まらぬ。

白衣にたゞ、珠數の色が紅に、玉を揃へた珊瑚の

やうでございましたとさ。

【完】